

十番切

ツレ（女） 二宮

シテ 曾我十郎

ツレ 曾我五郎

ツレ 新開荒次郎

ツレ 新田四郎

地は 駿河

季は 五月

サシ女

「是は二の宮と申す女にて候。さても曾我兄弟の人々は。親の敵討たんとて。幼少竹馬の昔より。野に臥し山に臥し。心を尽し給ひしかども。終に願ひも空しく過ぎさせ給ふ。今日御狩場の御供に紛れ。ねらひ給ふ御心の内。押しはかり参らせて。わらはも遁れぬ中なれば。御宮仕の隙を窺ひ。人々を導びき申さんとて。忍びて是まで参りて候。

地

「何くにかおはすらんと。かなたこなたと尋ね行

二人カゝル

く。心の内ぞ痛はしき。

「兄弟はかくとも知らで。仮屋の前にたゞずめば。

女

「さればこそこなたへと。さて国々の武士の。幕の内を委しく教へ参らせ。あれこそは人々の。尋ねる人の幕ぞとて。懇に教へ申し。命めでたく候はゞ。又こそ御目に懸らんと。

地

「涙と共に立ち別れ。く。稲葉の山の峰に生ふる。

松とし聞かば今一度。帰り来んと約束し。又御前

へぞ出でにける。く。

十郎詞

「かくて兄弟の人々は。二の宮の教により。祐経が
飯屋に忍び入り。

地

「年月の妄執。今宵こそ晴し給へ時致とて。思ふ敵
を討つたりけり。

五郎詞

「其時々致立ち帰り。如何にや祐経たしかに聞け。
箱根山にて我に得させし此太刀。只今返すぞ受け
取れとて。心もとに差し当て。踊り上つて打ちけ

れば。果報いみじき祐経も。二つになりてぞ失せ
にける。

地

「宿直の人々あわて騒ぎ。く。すはや夜討は曾我
兄弟ぞ。起き合へやつといふ声に。弓よ長刀太刀
よ刀と。前後を失ひ。上を下へと返しける。

地

「されども御前の人々は。く。我もくと切つて
出で。面も振らず懸りければ。本よりも兄弟は。
命も惜しまず切つて出で。兄弟が手に掛けて。や

にはに三騎討ちけるを。すかさず追つ詰め懸りければ。今は命限りの切死と。仁王立に立ち並べば。御前の武士は合ひかねて。其間遙に引いたりけり。

新開

「かゝりける処に。新開と名乗つて。

地

「祐成に討つてかゝりければ。得たりやあふとさんぐゝに。畳みかけられ叶はじと思ひけん。小柴垣を押し破つて。後這しつゝ遁れ入りければ。時致は遁さじと。御前をも憚らず。逃げ行く敵を目に

懸けて。跡を慕うて追うて行く。(中入)

新田詞

「然る処に新田の四郎忠綱は。君の仰せに随ひ。仮屋の前後を警固して居たりしが。見れば十郎祐成。血刀振つてまつしぐろに打ち入りけるを。

地

「留めんと思ひ打ち合ひけるが。無慙や祐成は。宵より疲れし事なれば。新手に責め立てられ。受太刀に為つて弱り行くを。畳みかけて打ち伏せつゝ。太刀押し拭ひ鞘にさし。心静に立ち帰る。

クセ

「無慙なるかな祐成は。臥したる枕より。如何にや如何に忠綱。我も遁れぬ中なれば。他人の見る目恥かしや。はや／＼討ち取り。後の世弔ひてたび給へ。時致はかくとも。知らで便や失はん。死出の山。三途の川も一所にと。誓ひし事も徒に。早是までぞ首打てや。南無阿弥陀仏と合掌す。

キリ地

「移れば変はる世の習ひ。今日此頃も膝を組み。互に隔てぬ中なれど。武士のはかなさよ。切らで叶

はぬ輪廻のきづな。南無阿弥陀仏と。首打ち落とし取り持ちて。御所へとてこそ参りけれ。く。